大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

女性の読書と女性小説：ドイツ18世紀末の読書現象をめぐって

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-07-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 星野, 純子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009989

女性の読書と女性小説
―ドイツ18世紀末の読書現象をめぐって―

星　野　純　子

1770－1810年の間にドイツではおよそ80人の女性作家により500編ほどの小説があらわされたと言われる。[1] 市民女性への教育的意図を前面に押し出したその多くの作品では、女性教育の重要な要素として必ず、女性の読書が勧められた。正規の学校教育の道が閉ざされていた女性たちにとって、教育とは読書による自己教育であったことを考えればこれは当然と言えるだろう。たとえば女子教育をテーマとした、フリーデリケ・ヘレーネ・ウンガーのベストセラー『ユルヘェン・グリュンタール　ある寄宿学校物語』(1784) [2] でも、ヒロインたちの成長のプロセスに書物や読書が中心的役割を果たしている。しかもここでは読書の勧めと並んで、幾度も繰り返し、女性の読書の危険性についての警告が発せられ、とりわけ危険な書として名指しで非難されるのは小説の類なのである。小説の中で小説読書に警告が発せられるというこの逆説的な取り扱い方は、当時の社会の読書をめぐる状況を視野に入れることなしには充分理解できないだろう。そこで本稿では、18世紀における読書という現象の、特に女性の読書の物質面とメンタリティー面とを考察することで、女性小説に外から光をあててみたいと思う。

(1)　新しい読者

18世紀のドイツでは書籍の出版は量的に大きな伸びを示したが、これは、読者層の非常な増加に応ずるものであった。読書はもはや一部の上層階級の特権ではなくて、すべての市民階層に広がり、質的にも、読書の態度と習慣

は大きく変化する。同じ本（特に聖書などの宗教書）を繰り返し読むというスタイルから、数多くの書物をたいていは一度だけ読むという形へと変化したのである。この「集中型」から「拡散型」へという、「読書革命」の転換点は18世紀後半にあった。[3] こうして生まれた新しい読者が特に好んで読んだのは、通俗哲学書や文芸物、小説、娯楽文学であった。ボジャン（M. Beaujean）が書籍市のカタログを分析した資料によると、1750年から1805年の間に、小説の出版点数（新刊のみ）は73タイトルから1168タイトルに増えている。[4] この頃の小説の販売部数は平均して700部から750部であるが、これに再版、増刷が加わるから実際の出版数はもっと多くなる。更に、当時は現在よりも「朗読」という読み方が普通であったし、読書協会や貸本屋の利用により本当の読者はこれの何倍にものぼることになる。

小説の読者は主として市民の女性だった。男性は職業として文学に関わる者しか小説を読まないという傾向が徐々に強まり、男性は小説を評論するため以外にはもう読まないのだから、読んでほしいと思うなら作家は女性のことを考えねばならないといわれ、受容面から見れば小説とは女性小説であると言うことが出来るほどになる。[5] しかし恐らく何冊もの流行の書物を実際に所有するという贅沢はほんの一握りの富裕な女性にしか許されなかったことだろう。

書籍はこのころはかなりの贅沢品で、特に18世紀末には非常に値上がりした。例えば、ライプチッヒでは18世紀半ばには平均４－５グロッシェンだったものが1760年には16グロッシェン、1785年には24－36グロッシェンと、８－９倍も値上がりしているのである。

総じて、雑誌や書籍は比較的高価だったため、1750年ころからドイツの都市では読書サークル（Lesezirkel）や読書協会（Lesegesellschaft）などがつくられ、共同で雑誌を予約講読したり、新聞、雑誌、書物を順番に会員の間でまわし読みしたりした。また、図書室を社交の中心とする読書クラブ（Lesebibliothek, Lesekabinette）がつくられたりした。しかし女性ははっきりと会則によってこのような組織からは除外されていることが多かった。そ

れにこれらのサークルでは文学や娯楽物の占める割合は小さくて、知識、情報、教訓、実用書が中心となっていた。いわゆる「文学」をほとんどの読書協会は基本的には受け入れず、たとえ受け入れた場合でも、市民生活に有用であるという観点から是とされた道徳的教訓的な作品であった。

読書協会や読書サークルが市民の自発的な組織であったのに対して、貸本屋（Leihbibliothek）は書物を貸すことでお金を得ようとする商人によって営まれたものであり、基本的にはあらゆる男女の階層に開かれたものであった。[6] すでに17世紀末には製本屋が片手間に営んだりしていたが、18世紀になるとドイツ全土に広がり、18世紀末にはさらに数多く設立され、復古時代（1815－48）に最盛期を迎える。大きさや、設備、外見によって、貸本屋といった方がよいようなものから、貸出し文庫、貸出し図書館と呼びうる立派なものなど様々であった。最下層には移動貸本屋、すなわち袋に本をつめて行商し、顧客のもとまで本を運び、また回収するというのがあった。大部分の貸し本業者は書籍（取次）販売業、古書商、紙屋、文房具屋などが兼ねていた。最上層には上述の読書協会に類するような、商人や知識人が中心となった読書室（Lesekabinett や Lesemuseum）があった。書籍商の協会（Institut）が新聞雑誌とならんで貸し出し図書などを提供する場合もあった。参考図書を備えた読書室、新刊書や、時には美術品や商品のための展示室、音楽室、談話室などもあり、内外の人々が集まりニュースを交換する場となるようなものは、ウィーン、フランクフルト、ライプチッヒ、ドレスデンなどで18世紀末につくられた。大きな貸出し図書館には新聞雑誌サークルがつけ加わることもよくあった。戯曲作品、児童、青少年文学などの特別な文庫、また、専門書や外国語の作品のための文庫などもあり、楽譜の貸出し文庫は家庭の集まりでの音楽の演奏を、演劇の文庫は劇作品の私的な上演を初めて可能にした。啓蒙的な読者に特に専門書を提供する百科全書的貸本屋もあったが、復古時代には物語類がはっきりと主流を占めたので、ついには貸本屋といえば小説と考えられるようになったほどで、この頃、全文学作品の４分の３は貸本屋の手に渡ったという。つまり小説はほとんど貸本屋から借りて

読まれたということになる。19世紀後半には貸本屋は危機におちいる。その要因はさまざまだが大きな企業の独占、過当競争のための貸し出し料金の凍結、文学の過剰生産、また、新聞連載などにより小説が安く入手可能になったこと、家庭蔵書の実現、衛生上の理由などがあげられる。

1800年頃にはほとんどの都市に貸本屋があり、特に大都市での伸びはめざましいものがあり、1811年にベルリンでは27、ドレスデンでは16の貸し本屋があった。[7] その一端を伝えるものとして、ボジャンのあげたクライストとハウフの報告を紹介しておこう。[8]

クライストは1800年にヴュルツブルクの貸本屋（クライストの記述によると Lesebibliothek となっている――筆者）を訪れた時の様子を婚約者のウィルヘルミーネに宛ててこう書いている。

> 「ここではどんな人がよく読むのかね。」――「法律家や商人や既婚のご夫人です。」「未婚の女性はどうだね」――「許されていません」。「じゃあ、学生は」――「学生には貸さないようにと命ぜられております。」「そんなにわずかしか読まないのなら一体、ヴィーラントやゲーテやシラーの著作はどこにあるのかね。」――「恐れいりますが、そういう著作はここでは全然読まれないのです。」「ではここには全然ないというのだね。」――「必要ないのです。」「それじゃ、そこの壁にはそもそもどんな本が並んでいるのかね」――「騎士物語、ただ騎士物語だけです。右は幽霊の出てくる騎士物語、左は幽霊のいない騎士物語、お好みによって。」[9]

次は1825年に ハウフ が貸本屋を訪れた時の光景である。

> ある召使いが私たちを遮った。「ラングスドルフ伯爵夫人が一冊所望しておられます。」と彼は言った。「どれにしましょうか」「どれとはおっしゃっていませんが、幽霊物語をお望みだと思います。」「幽霊物語で

すか」と小柄な店員は見回しながら尋ねた。「騎士物語でもよろしいでしょうか。幽霊ものはみな出はらっているのですが」「ええ、ただ本当に恐ろしいものをね、そんなのがお好きなのです。私たちはこの前に借りた、暗黒の廃墟とか地下の牢獄とかのようなものがとても気に入りました。」と召使いは答えた。「それじゃ、あなたも一緒にお読みになるので？」と店員はびっくりして尋ねた。「伯爵夫人が読み終えられた後で、われわれも召使い室で読むのです。」[10)]

貴族から召使いの階層に至るまで通俗文学の読書がひろがり、それに貸本屋の存在が大きく与かっていたことがうかがえる。

(2) 読書の時間

普通の市民女性にとっては、本を読むことは金銭的に贅沢なものだったが、時間的にもむずかしいものであった。しかしまずは時間的にも経済的にも豊かな上層階級の読書熱についてみてみよう。シュトールベルク伯爵家に朗読係として住み込んだ市民の少女、ルイーゼ・マイヤーの手紙の一節である。

私は伯爵夫人（Luise Gräfin Stolberg）の朗読者兼秘書になることになりました。[…] ここでは鵞鳥に麺球をいっぱい食べさせて肥育するように人間に書物が詰め込まれます。伯爵夫人は今日勘定を締めましたが、今年は新聞、雑誌などは別にして、75巻読破し、911通の手紙を書かれたのです。[…]
さて私たちの日課をお話しましょう。10時に朝食をとります。それから、伯爵は聖書の１章とクロプシュトックの詩集から歌をひとつ朗読されます。各自は部屋にひきあげます。私はそれから伯爵夫人が渡される、『スペクテイター』、ラーファーターの『観相学』、その他幾冊かを読みます。ロッテが翻訳している間、夫人はわたしのところに下りてこられ、私は

夫人にラーファーターの『ポンティウス　ピラトス』を一時間朗読してさしあげます。夫人がラテン語の授業の時には彼女のために清書するか、食事の支度ができるまで自分で読書します。食事とコーヒーの後、フリッツがヒッペルの『自伝』を読みます。それからロッテが私のところへ下りてきて、一緒に1時間、ミルトンを読みます。その後また私たちは上に行き、9時のお茶の時間まで、伯爵夫妻のためにプルタークを朗読します。お茶の後、伯爵は聖書の1章とクロプシュトックの歌をひとつ朗読なさって、これでお休みなさいとなります。[11]

(Luise Mejer an Heinrich Christian Boie 1783/84)

ここではまだ前時代の読書形態がある面では残っていて、労働しなくてもよい貴族階級の贅沢な読書のさまが描かれている。朝と晩に家長による宗教書の朗読で枠組がつくられ、低俗な小説などではなく教養書や内外の古典が読まれ、しかも朗読係までがいる。

しかし市民女性はこんな具合にはいかなかった。市民にとって読書は労働の代わりにではなく、労働の後にある。道徳週刊誌においても、「美徳ある少女は、女性としての仕事と家政の仕事が時間的に許されたとき初めてたくさんの美しい本を読むのである。…」(1727)[12] と、読書の奨励と並んでいつも、女性としての義務を忘れて読書にふけらないようにという忠告がなされていた。そればかりか、糸紡ぎをしながら読書もできる賢い主婦の例と、そのために特別に作られた読書台が紹介されたりもしている。

この台は糸紡ぎに役立つだけではなく、縫い物やかがりものなどにも役立ちます。そういう仕事をしている時に　その仕事しか考えないということは私にはできません。手仕事をしていても私の魂には充分空間があるので、熟考しながら読むことができるのです。しかしまた、家の仕事もしないで読書だけというのも、私には出来ないことです。(1749)[13]

まるで「ながら族」の勧めである。ここから、男性の読書と違って、女性にとっては家事も読書もこの程度に心の集中を要求しないものとみなされたのだという解釈もできるし[14]、女性にとって最早読書が特別で異常なことではなく、日常性に属していたとも解されるだろう。[15] あるいは、手仕事による手の束縛で頭と手を切り離すことによって、「テクストでの欲望が肉体の欲望と組み合わされるのを防ぐ有効な技法」[16] を読み取ることも可能かもしれない。いずれにせよ、有用性という観点から、読書も勤勉さや時間の節約という近代市民道徳の中にしっかりと秩序づけられ、単なる娯楽ではなく教養へ組み込まれべきであるとされる。

この頃、市民男性は家庭外での就労という状況から、労働と余暇の分離という近代的な思考形態を徐々に形成しつつあった。読書は心性としても、この余暇時間に割り当てられるが、家庭にあって、時間的にも空間的にもそのような截然が不可能な生を生きる女性にも、仕事と余暇の時間的分離の男性的モデルが秩序ある読書として推奨されるのである。

(3) 識字力と文学能力、男性による読書指導

読書のための大前提は文字が読めることであるが、文学を読む能力は識字能力に加えてさら なる訓練が必要である。18世紀末には読み書き能力をもった層は広がり、読者公衆として文学に影響力をもち、作家として活躍する女性もすでに数多く登場しているのだが、1800年頃でも女性の3分の1は文盲で、大部分は基本的な読み書きを習っただけで、きちんとしたテキストは読むことも書くこともできなかったといわれている。また教養市民層の男性は専門教育の過程で、文学や虚構テキストの扱い方を、時代の美学状況に応じて習得するのだが、女性の教育は普通、男性よりははるかに低い段階で終わってしまう。だから形式的な読みの能力だけしかなく、美学的意味での文学能力がない例は同じ市民層でも圧倒的に女性に多い。例えばヴィーラントは1765年にアウグスブルクの富裕な商人の娘、アンナ・ドロテア・ヒレンブ

と結婚したが、彼女の読書能力についてこう言っている。

> 彼女は言葉も初めて学ばねばならないのです。というのも、この人の良い少女は家族のひざの中で学ぶことが出来たよりほかにはドイツ語について何も知らず、読み物といっては、聖書とカレンダー以外問題になったことはないのです。[…] ゲスナーもゲラートもハーゲドルンも知らず、イギリスの小説が何であるかも理解できず、比喩と詩的形容がぎっしり詰まった言葉はまるでギリシャ語のように思えて、私の書く道徳物語などほとんど理解できないような女性と一緒で、私が幸福でいられるなどとは、文学好きな古くからの友人達は、理解に苦しむことでしょう。
>
> (Wieland an Sophie La Roche, 11.12.1765) [17]

こうした男女の能力の落差のために、男性がいつも教師、夫、家父として女性の読書指導にあたることになる。初期啓蒙主義時代第一の学識ある女性、ゴットシェード夫人もそれを当たり前のこととして受け入れ、ある若い女性へこう助言している。

> 何の選択もしないで本を読み、そのためにそれ自体有益なたくさんの書物をさっと読むだけで何の役にもたてないというのが、女性に限らず若い人たちの大きな誤りのひとつなのです。読書を全然好まないということも、宗教や道徳にもとるような著作を読むことほどには悪いことではありません。非常な無知も、とくに女性の場合には、危険な書物で有害な知識を得ることよりはむしろ許されるし、勧められるとさえ言いたいのです。危険な書物は徐々に効いてくる毒薬のように理性と心に癒せない傷を残すのです。
>
> (Luise Gottsched an Wilhelmine Schulz, 1750) [18]

また、ヴィーラントの妻の場合などとは違って、読書能力も知識も十分に

あり、自立的な読書が可能な場合にも事情はかわらない。ゲーテが妹コルネーリアに対して行った読書指導はその好例であろう。18世紀後半の裕福な市民女性の例にもれず、コルネーリアは学識も意欲もある読書家だったが、男性のように大学で正規の教育を受ける機会は閉ざされていた。1765年にゲーテは遊学先のライプチッヒから15歳の妹にこう書いている。

> 君はグランディソンには全くばかのように心酔しているね。[…] 君はもう子供じゃないのだから、単に楽しみのためにだけでなく、理性を改善し、意思を改良するために読書しなければならない。[…] 君に読書の仕方も教えておこう。[…] 書物は順番に注意深く、たとえ気に入らなくても最後まで読み通さなくてはならない。がんばってそうしなくてはならないんだ。
>
> (Goethe an Cornelia, 1765)[19]

ゲーテはまた、重要な犯罪例や刑事事件を集めた『ピタヴァル刑法判例集』は道徳的見解や感情のない単なる報告であって女の読むものではないとか、『デカメロン』のようなエロティックなものは女にはふさわしくないなどと具体的に良い本と悪い本のリストアップしている。女性に適した読み物としては、リチャードソンの小説、仏、英、伊の文学、書簡、モリエールの喜劇、タッソーなどが薦められる。ここで指導されるのは、どんな本を読むべきかということだけではなく、正しい読書の方法である。読書に楽しみを求めるのでなく、気に入らなくても最後までがんばって読まねばならないという考え方が女性に教えられるのである。

この頃、男の読書と女の読書とははっきり違ったものになりつつあった。修辞学や宮廷社会の作法の教科書としてギャラントな小説の読書が薦められた前世紀とちがって、18世紀には、男たちが小説を読むのは成人に達するまで（職業生活がはじまるまで）に限られるようになる。成人以後は新聞や職業に必要な実用書を読むか、たとえ小説を読む時にも娯楽としてでなく、教

養として読むようにと要求されるようになった。この頃のある読書指導書ではこう述べられている。

> そもそも文体の美しい芸術作品の読書においては、単に内容だけでなく形式や書き方などをも見るべきである。それによって教えられたり、改善されたり、教養を得たりするだけではなく、これを自分の手本とすべきである。なぜならばそうすることで読書は二倍に利用でき、二倍に楽しむことが出来るのである。それは実際あらゆる教養ある人にとって不可欠である。[20)]

娯楽を求める読書は文学的能力のない読みかたであり、美的形式より素材にのみ関心が向けられる劣った読書方法であり、矯正されるべき女性の読み方だとされ、女性の読書も男性的原則に従うべきだという指導がなされるのである。

(4) 「読書中毒」批判

18世紀半ばにあらゆる階層にますます広がりを見せた読書の欲求に対し、18世紀末にはこれが「読書中毒」、「読書狂」として激しく批判されるようになる。

17世紀の読書をめぐる議論は、文学そのもの、読書そのものの是非を問題としていて、小説の虚構性が激しく弾劾された。小説を読む人は嘘を読むのだから虚構によって歴史の事実性から逸脱することになり、本当の歴史に働き認識できる神の摂理に疑問を投げかけ、本来、魂の幸福のために用いるべき時間を浪費することになる。また小説は道徳的に悪影響がある、という理由で批判がなされた。[21)]

次の時代、道徳週刊誌による市民の論争では、論点は世俗化され、小説はギャラントな色事で不道徳へと導くものであると、貴族の宮廷的生活規範へ

の批判が正面に出てくる。ばかげた、荒唐無稽な、架空のありもしないものを描くことは批判されるが、虚構であっても理性的で本当らしさと矛盾しない時には肯定されるようになる。また同じく非難された、時間の浪費という点についても、有用な行為の怠慢、職業上の義務の不履行、女性の場合には家事をなおざりにするという面からの批判になる。

1740年から50年代に小説が変化し、たとえばゲラートの小説のように、色事小説でない小説がでてくると、小説は素材面からは是認されるようになり、有用な知識や道徳的改良の手段として、読書の啓蒙的目的に沿うものとして、小説読書も推奨されるようになった。しかし、次第に小説が啓蒙的機能から自由になるにつれ、18世紀末には再び、小説の読書が問題視されることとなる。読書の非常な広がりと欲求に対する、驚きや心配や不安の念は、「読書中毒（Lesesucht）」とか「読書狂（Lesewut）」と、あたかも疫病を語る時のような表現で表明される。この「読書中毒」批判は、特に市民女性に対してなされ（次に、青年、民衆に向けられる）、中心となる契機は読書態度、動機、読み方に関わるものであった。啓蒙的な有用な読書は是認されるが、想像力をかきたてる小説などの快楽としての読書は病気を引き起こすものとして非難されるのである。これは、男子青年へのマスタベーション議論と対をなしていて、過度の読書は特に女性にとっては性的にも危険性が高いものとして次のように警告される。

> 過度の読書は肉体を弱くし破壊するということは疑いない。それは、理性が特にその影響を表すような器官を直接に攻撃するということだけが考えられているのではない。[…] 読書する時の強いられた姿勢とあらゆる身体的動きの欠如が、想像と感覚の非常に強い交替と結びついて、内臓に無気力（弛緩）、粘液分泌、鼓腸、便秘を、一言で言えば、ヒポコンデリーを生み出すのである。それは、つまり、女性の場合にはまさに、性器官に影響を与え、血液の停滞と腐敗、神経系の過敏と疲労、全身の衰弱と軟弱を生み出す。衰弱した軟弱な身体ではしかし欲情の刺激が非

常に敏感になり、内的力と自己活動を傷つけられた魂における発作的な性衝動は、落ち着いた健康な身体と魂が享受するよりは、はるかに抵抗し難いものになるということはよく言われることであり、ここで更に証明する必要もないだろう。[22)]

ほとんどヒステリックともいえる語調でなされた男性によるこのような「読書狂」批判の中心的動機を、シェーン（Schön）は近代初期に、文明化の過程で社会的歴史的規律を身につけてしまったためにもう女性のように自由に快楽としての読書に身をまかせることが出来なくなった男性の密かな羨望や不安にあると分析して、こう述べている。

女性の読書に対する男性の批判の背後には、自分はもはやそう読むことはできないという自らの哀しみがある。男たちは文明化された規律化の過程で彼ら自身はそこから切り離されてしまった、あの経験や体験方法が、女性においてはまだ保持されているのを見たのである。[23)]

(5) 女性小説と読書への警告

さて以上のような背景を念頭において、女性にとっての推薦図書、及び禁書の具体例をもう少し詳しくみておこう。

女性が何を読むべきかについてはすでに、初期啓蒙主義時代に、多くの道徳週刊誌がそのリストをあげていた。特に1720年代には三大道徳週刊誌、『愛国者』、『画家談義』、『理性的な叱責者』が相次いで推薦図書のリストを数ページにわたって「女性のための図書（Frauenzimmerbibliotheke）」として載せている。1724年にハンブルクの週刊誌『愛国者』が提案した、およそ90のタイトルの内訳は、信仰と教化のための書物25、知識と娯楽のための書物35（旅行記、ドイツ語とフランス語の教科書、その他ほとんどあらゆる知識領域の本）、処世訓18（モンテーニュ、モリエール、英仏の寓話など）、

家政の書10となっている。他の二誌、『画家談義』(1723)、『理性的な叱責者』(1725) にあらわれたのも同じようなものであった。[24] 前の時代と比べ、読書の傾向が宗教書から世俗の書物に移っているのが大きな特徴である。1780年頃まで次々と刊行された道徳週刊誌には、その後も幾度か女性のための推薦書のリストが載せられるが、それを詳しく分析したマルテンス (Martens) によれば、女性の教養の内容が徐々に文学に移行しているのが傾向として確認されるという。[25] 「道徳週刊誌」の執筆者は、時に女性を偽装することはあっても、すべて男性だったのだが、やがて『シュテルンハイム嬢物語』(1771) を皮ぎりに続々と登場した女性作家もこの読書指導をみずからその著作を通して行うようになる。

カムラー (Kammler) が調査した資料によると、1790－1810年の間の30人の女性作家の60編以上の小説、物語などでは、112の書籍タイトルが直接、間接に言及されていて、内訳をみると、宗教書7、実用書、哲学的教育的内容のもの44、文学61となっている。また、そのうち、26人の作家について文学作品の言及についての調査では、ウンガーが65タイトル、ラロッシュが44タイトル、ノイエンハーゲンが41タイトル、ピヒラーが35タイトル、以下バンデマー、フーバー等々と続き、ウンガーとラロッシュがとりわけ広範な文学知識を有していたらしいことがわかる。[26]

ラロッシュは特に自分の著作活動の目的を意識的に女子教育においていたので、小説、雑誌、自伝、旅行記など、どの著作でも機会あるごとに、有用な読書の宣伝を忘れなかった。

彼女は雑誌『ポモナ』(1783－84) では、天文学、自然史、地理学、家政学、医学などからの通俗学問的な文献の情報を紹介し、推薦図書としては同時代の批評によって支持され、すでに一定の価値をもっている書物のタイトル――例えば、E. v. クライスト、ヤング、ブロッケス、トムソン、リチャードソン、ルソーの『エミール』といった――を好んであげた。 また、晩年の回想録『私の文机 Mein Schreibtisch』(1799) では、自分の蔵書を詳細に描写して順番に紹介し、144タイトルとヴィーラントの全集、ビュフォンの百科

事典などをあげている。これは、先の、18世紀前半の道徳週刊誌による推薦図書のほぼ2倍になっていて、特に、一人の女性が所有した実用書の大きな割合は驚くべきものだという。[27] ところがラロッシュは小説に対してはアンビバレントな態度を取り続けていて、「…隅の棚にある小説の名を挙げるようにとは要求なさらないでしょう。本当は私もそれを満足して読んだのですが…」と、文芸作品は推薦図書からは除外している。[28]

次にウンガーの場合を『ユルヒェン』を例に具体的に見てみよう。この小説は田舎の純朴な少女がフランス流の寄宿学校で受けた誤った教育のせいで、次第に道徳性を失い、転落の道をたどるという物語である。[29] ユルヒェンの道徳的堕落を引き起こす要因となったのが、ラファイエット夫人の『クレーヴの奥方』やマリヴォーの『成り上がり百姓』、クレビヨンの作品（1－260）、ルソーの『新エロイーズ』（1－267）、ゲーテの『シュテラ』（1－400）などの読書である。このほかに、父親のグリュンタールの話の聞き手である牧師夫人が読んでいた、エーヴァルトの『ローゼンムンデ』（1－19）もよくない小説として指弾されている。また、校長ブレンフェルト夫人がレッシングの『断片』――これはライマールスの遺稿を『無名氏の断片』としてレッシングが出版した、理性宗教の立場から既成宗教を批判した書で、彼女は哲学書や宗教書などを多読し、啓蒙家を標榜する、学者ぶった女らしくない人物として戯画的に描かれている――を読んでいると非難されている。これは例外で、禁書のほとんどが小説（『シュテラ』はドラマであるが）であることは注目に値する。逆に読むべき書物として題名、著者名のあがっているものを見てみると、ヘルメスの『宗教便覧』（1－282）、ドッドリッジ（1－282）、グライム（2－41）、シュパルディング（2－169, 328）、ドルバックの『自然の体系』（2－96）、ボーモン夫人（2－42）といった、宗教、教育、哲学的な内容の書物である。

この読書の勧めと禁止、有用な啓蒙書、宗教書の推薦と小説の禁止という取り扱いは、先述の、いわゆる「読書中毒」、「読書狂」に対する批判とぴったり照応している。

それでは次に危険な読書の実際の過程がどう描かれたかを見てみよう。

回想記で愛読の小説名をあげるのをためらったラロッシュは、すでに第一作『シュテルンハイム嬢物語』(1771)において、危険な有害図書は追放するという態度をとっていた。悪漢ダービー卿がヒロイン、ゾフィーをだまして偽装結婚し、彼女の情熱をあおりたてようとして与えた「情熱的で生き生きとした官能的なイメージでいっぱいの」イギリス本を、ゾフィーは見ることもなく焼き捨てしまうのである。[30]

そもそも　読書の危険を警告するには、警告者は少なくともその内容を知っていなければならない。そしてどのように危険か、どのような悪影響を読者に及ぼすか、納得のいくように伝えようとすればするほど、克明な描写が必要になり、追体験をせまることになってしまい、かえって小説への興味を呼び起こすという矛盾をはらんでいる。これをいさぎよしとしないラロッシュは結局、テキストそのものを抹消してしまうのである。

それに対してウンガーの態度はラロッシュほど安全な場所には逃げ込んでいないように思われる。彼女はルソーの『告白』や『孤独な散歩者の夢想』、マリヴォーの『マリアンネの生涯』のドイツ語への翻訳者だったが、そのルソー自身が『新エロイーズ』の序文で、「純潔な娘は未だかつて小説など読みはしなかったし、また私としてはこれを開けば疑いの余地がないくらい決定的な題をこれに附けておいたのである。この題をも無視してあえて一頁でも読もうとする娘はいたずら娘だ。だがそのような娘は自分の堕落を本書のせいにしてはならない。それより前に禍はすでに起こっていたのである。読み始めた以上は読みおわるがよい。今更何も危険に曝すわけではないのだから。」[31] と小説の読書に警告を発していた。ウンガーはこのやり方を文学的伝統として踏襲し、具体的な書名もあげて警告しながらも、それがどのような影響を与えたかについても細かく描写するという方法をとる。つまり、『ユルヒェン』では、単に女性の読書についてたびたび言及されたり、警告されるだけではなく、読書そのものが筋の展開の非常に重要なモーメントとなっているために、その描写を省くことは不可能なのである。

寄宿学校で働く年老いた耳の悪いフランス人女教師は、生徒たちに、トランクにしまってあった自分の若き日の愛読書、『クレーヴの奥方』や『成上がり百姓』、クレビヨンの作品など、フランスの小説類を読ませ、この「感情の秘奥をかきえぐり沸き立たせ、熱い火と燃え上がらせるような小説類」（1－261）の読書がユルヒェンの心にも強烈な作用を及ぼし、道徳的社会的堕落を引き起こす一因となる。

また、ユルヒェンのルイに抱いていた感情は、校長ブレンフェルト夫人の命で朗読させられた『新エロイーズ』の読書によってはっきりとしたイメージを与えられる。しかし、愛と情熱を断念して美徳へと歩むジュリーとは違って、ユルヒェンはこれにより美徳を踏み外す行動へと導かれることになる。「小説のどの言葉も私の魂によって書かれ、どの言葉も燃えるように私の心の中に書き込まれたと」（1－268）思うユルヒェンは、ジュリーに全面的に感情移入してしまう。混沌とした内なる感情と情動に形を与えられた彼女は、行動へとうながされ、ルイにはじめての愛の手紙をしたためるのである。

さらに、従姉の家に預けられたユルヒェンは、従姉の夫と一緒に戯曲『シュテラ』を朗読することで、彼との情熱をもはや押しとどめることが不可能になる。三人所帯という自分たちと同じ設定にあるこの作品の、「誘惑的魅力をもった」（1－400）表現を朗読によって再現することで、作品中の人物と一体化してしまうのである。そして、二人の熱にうかされたような朗読の場を目撃した従姉カロリーネは終に離婚を決意する。

さて、ユルヒェンはロシアへの逃避行の中で、自分の過去を顧み、徐々に真の自己を見出していくのだが、その筋の展開にも読書は大きな位置を占めている。ロシアで伯爵夫人オイドクシアに朗読係として仕えることになったユルヒェンは、その魅力的な朗読により、フランス人家庭教師とフランス語の書物を追い払い、健全なドイツの古典で置き換えてしまう（2－294）。ここでは欲望をかきたてるのではなく、心を落ち着かせる「正しい」読書のあり方が示され、この行動がやがてユルヒェンのドイツへの帰郷へと結びつくことになる。

そして、ドイツに帰ったユルヒェンはある公妃のもとでも朗読係として仕えるが、公妃は官能性をあおりたて刺激する書物を朗読させることで、彼女にレスビアン的誘惑を仕掛ける（2－332）。ところが、「官能性の密やかな深みを揺り動かす」（2－331）この読書はもはやユルヒェンを刺激することはなく、ただ驚きのあまり失神することで身を守り、結果として宮廷を去り、父の許へ帰還する契機となる。

転落の原因となる読書が直接体験としてなまなましく描写されたのに対し、この正しい読書の場ではユルヒェンは朗読係としてだけ書物に関わっている。貴族の家に住み込み、話し相手や朗読をつとめるのは、教養ある市民の少女に当時許されていた数少ない職業のひとつであった。ユルヒェンは仕事として、いわば半ば公的に読書とかかわることで、書物に距離をおいてつきあうことになる。刺激的な小説も、朗読するユルヒェンにはもはや直接的に作用することがない。小説の内容に熱狂的に感情移入して主人公に一体化するのではなく、テキストの支配に身を任せない読み方、この読書法こそまさに、「読書狂」批判において、女性も身につけるようにと、推奨された読み方であった。読書の対象のみならず、読書の方法においても女性作家の読書指南は「読書狂」批判と歩調をあわせていたのだといえるだろう。

しかし、それにしても、よき読書の対象は漠然と「ドイツ古典」といわれるだけである。伯爵夫人オイドクシアはドイツ語を好み、ドイツ古典の蔵書家だった。だが「気分を落ち着けるために」（2－305）ユルヒェンに命じたゲーテの朗読も、夫との不仲に思い乱れる彼女の心を静めるには役立たず、すぐに読むのを止めさせる。教養としての読書は心の内奥へと入り込むインパクトを失っているかのようである。

観念を伝達し情報を伝える実用書の読書と異なり、小説の読書は想像力を解き放ち、新しい経験を媒介せずにはおかない起爆力をもっている。禁書とか警告といったねじれた形で描かれるにせよ、女性小説の中でこのような読書が少女たちの成長過程での必然として大きな意味を荷わされていることは、女性作家たちの巧みな自己主張のやり方ともいえるのである。

注

1 Helga Gallas, Magdalene Heuser : *Einleitung.* In : Helga Gallas, Magdalene Heuser (Hg.): *Untersuchungen zum Roman von Frauen um 1800.* Tübingen, 1990, S. 4.

2 Friederike Helene Unger : *Julchen Grünthal. Eine Pensionsgeschichte.*

3 Rolf Engelsing : *Der Bürger als Leser Lesergeschichte in Deutschland 1500-1800.* Stuttgart, 1974. このテーゼに対して、特に、多読が拡散的読み方を意味しないという観点などからの批判については以下の文献を参照。

ロバート・ダーントン著 海保真夫・鷲見洋一訳：読者がルソーに応える――ロマンティックな多感性の形成――（『猫の大虐殺』岩波書店、1990年）

ロバート・ダーントン：読むことの歴史（ピーター・バーク編 谷川 稔、谷口健治、川島昭夫、太田和子 他訳『ニュー・ヒストリーの現在 歴史叙述の新しい展望』、人文書院）

Erich Schön : *Der Verlust der Sinnlichkeit/oder Die Verwandlungen des Lesers, Mentalitätwandel um 1800.* Stuttgart, 1987.

4 書籍出版をめぐる状況については以下の文献を参照した。

Horst Albert Glaser (Hg.) :*Deutsche Literatur, Eine Sozialgeschichte. Bd 4 : Zwischen Absolutismus und Aufklärung : Rationalismus, Empfindsamkeit, Sturm und Drang 1740-1786. Bd 5 : Zwischen Revolution und Restauration : Klassik, Romantik 1786-1815.* Hamburg, 1980.

Rolf Grimminger (Hg.) : *Hansers Sozialgeschchte der deutschen Literatur, Bd 3 : Deutsche Aufklärung bis zur Französischen Revolution 1680-1789.* München, 1980.

Erich Schön : a.a.O.

5 Erich Schön : *Weibliches Lesen Romanleserinnen im späten 18. Jahrhundert.* In: Helga Gallas, Magdalene Heuser (Hg.), a.a.O. S. 22ff.

6 貸し本屋については特に次の文献を参考にした。

Georg Jäger, Alberto Martino und Reinhard Wittmann : *Die Leihbibliothek der Goethezeit Exemplarische Kataloge zwischen 1790 und 1830.* Herausgegeben mit einem Aufsatz zur Geschichte der Leihbibiliotheken im 18. und 19. Jahrhundert.

Hildesheim 1979.

7 Alberto Martino/Marlies Stützel-Prüsener : *Publikumsschichten, Lesegesellschaften und Leihbibiliotheken.* In : Horst Albert Glaser (Hg.) : a.a.O. Bd 5. S. 49.

8 Marion Beaujean : Nachwort zu : *Erzählende Prosa der Goethezeit.* Bd 2. Hildesheim, 1979, S. 591.

9 Kleist an Wilhelmine von Zenge, 14. September 1800 In : H. v. Kleist : *Sämtliche Werke,* Brandenburger Ausgabe, Bd. Ⅳ/1 Briefe Ⅰ. Frankfurt a.M, 1996, S. 293.

10 Zitiert nach Marion Beaujean a.a.O. S. 591.

11 Schreiber, Ilse (Hg.) : *Ich war wohl klug, daß ich dich fand. Heinrich Christian Boies Briefwechsel mit Luise Mejer 1777-1785.* München 1980, S. 271, 274. In : Andrea van Dülmen (Hg.) : *Frauenleben im 18. Jahrhundert.* C.H. Beck, 1992, S. 264.

12 Zitiert nach Barbara Becker-Cantarino : *Der lange Weg zur Mündigkeit, Frau und Literatur (1500-1800).* Stuttgart, 1987, S. 174.

13 Wolfgang Martens : *Die Botschaft der Tugend, Die Aufklärung im Spiegel der deutschen Morarischen Wochenschriften.* Stuttgart, 1968. S. 535.

14 Barbara Becker-Cantarino, a.a.O. S. 175.

15 Wolfgang Martens, a.a.O. S. 535.

16 Helga Meise, a.a.O. S. 63.

17 Michaer Maurer (Hrsg.) : *Ich bin mehr Herz als Kopf, Sophie von La Roche, Ein Lebensbild in Briefen.* München, 1983, S. 78ff.

18 Luise Gottsched an Wilhelmine Schulz. In : Andrea van Dülmen (Hg.) : *Frauenleben im 18. Jahrhundert.* C. H. Beck, 1992, S. 260.

19 Andrre Banuls (Hg.) : *Goethe an Cornelia, Die dreizehn Briefe an seine Schwester.* Hamburg, 1986, S. 38ff.

20 Heinrich Ludwig de Marees : Anleitung zu Lektüre, Hamburg, 1806. Zitiert nach Erich Schön : *Weibliches Lesen.* S. 33.

21 Vgl. Erich Schön : *Der Verlust der Sinnlichkeit.* S. 46ff.

22 Karl-Gottfried Bauer : *Ueber die Mittel, dem Geschlechtstriebe eine unschädliche*

Richtung zu geben. Mit e. Vorrede u. Anm. v. C. G. Salzmann, Leipzig, 1791, Zitiert nach Erich Schön : *Weibliches Lesen.* S. 38.

23 Erich Schön : *Weibliches Lesen.* S. 40.

24 Barbara Becker-Cantarino, a.a.O. S. 173.

25 Vgl. Eva Kammler : *Zwischen Professionalisierung und Dilettantismus, Romane und ihre Autorinnen um 1800.* Opladen, 1992, S. 18.

26 Vgl. Kammler, a.a.O. S. 21ff.

27 Vgl. Helga Meise : *Die Unschuld und Schrift, Die deutsche Frauenroman im 18. Jahrhundert.* Frankfurt a. M. 1992 (1983), S. 59.

28 Zitiert nach Helga Meise, a.a.O. S. 59.

29 拙稿：ドイツ初期女性小説の一側面――ヘレーネ・ウンガーの『ユルヒェン・グリュンタール』について。（大阪府立大学独仏文学研究会 『独仏文学』 第31号 1997を参照。

テキスト：*Julchen Grünthal. Dritte durchaus veränderte und mit einem zweiten Band vermehrte Ausgabe.* Berlin 1798. Bei Johann Friedrich Unger（*Frühe Frauenliteratur in Deutschland.* Hrsg. von Anita Runge, Band 11-1, 2. Friederike Helene Unger : *Julchen Grünthal.* Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Susanne Zantop, Georg Olms Verlag 1991. 作品からの引用はこのテキストの巻数と頁数を括弧内に示した。

30 Sophie von La Roche : *Geschichte des Fräuleins von Sternheim, von einer Freundin derselben aus Original-Papieren und anderen zuverlässigen Quellen gezogen.* Herausgegeben von C.M. Wieland. Vollständiger Text nach der Erstausgabe von 1771. Hrsg. von Günter Häntzschel, München, 1976, S. 189.

31 ルソー著　安土正夫訳：新エロイーズ、岩波書店、昭和48年　13頁。

Frauenlektüre und Frauenromane im 18. Jahrhundert in Deutschland

Sumiko Hoshino

In Deutschland wurden zwischen 1770-1810 etwa 500 Romane von 80 Autorinnen geschrieben. Fast alle Schriftstellerinnen betonten dabei, daß sie für Frauenbildung beitragen möchten und mit pädagogischer Absicht Romane schrieben. Sie empfahlen also in ihren Romanen mehrmals Frauenlektüre. Aber merkwürdigerweise warnten sie auch zugleich mehrmals stark vor der Gefahr des Lesens, besonders des Romanlesens. Um diese widersprüchliche Behandlung des Lesens genug zu verstehen, wird hier versucht, die Lesesituation im 18. Jahrhundert in Deutschland zu betrachten und Frauenromane von außen her zu beleuchten.

Zuerst wird eine Überblick über die damaligen Lesesituationen gegeben: die Entstehung neuen Lesepublikums, massenhafte Buchproduktion, der Übergang des Leseverhaltens, nämlich, von der Wiederholungslektüre zur einmaligen Lektüre, neue Lesemöglichkeiten durch Lesegesellschaft oder Leihbibliothek u.s.w.

Dann wird analysiert, wie, was und wann die Frauen in dieser Zeit lasen beziehungsweise lesen sollten. Die Diskrepanz zwischen diesem Lesekanon und der Lesewirklichkeit verursacht am Ende des Jahrhunderts die heftige Kritik gegen die sogenannten "Lesesucht" oder "Lesewut" bei Romanleserinnen.

Wenn man in Schriften von Autorinnen untersucht, welche Bücher und welche Leseweise als gut oder als böse genannt wird, dann kann man leider nicht verneinen, daß die Schriftstellerinnen auch mit dieser "Lesesucht"-

Kritik Schritt halten. Aber es sollte nicht übersehen werden, wie einige Romanschreiberinnen (z.B. Friederike Helene Unger in "Julchen Grünthal") auch Romanlesen so darstellen, daß Lektüre, die Phantasie in Bewegungen bringt und Leserinnen neue Erfahrungen und Aktionen vermittelt, ein notwendiges Stadium für ihre Entwicklung bedeutet.